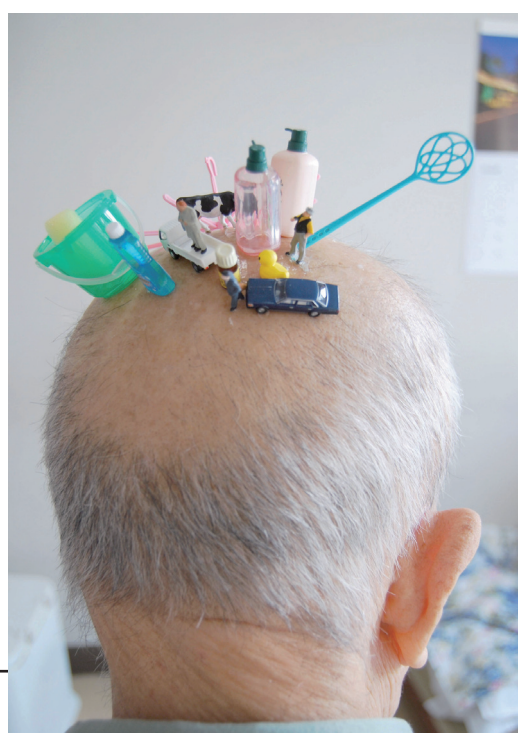


2009年9月3日(木) 18:00~21:30

会場/リクルートGINZA7ビル セミナールーム
会期/2009年8月24日(月)~9月17日(木)



夜中に目を覚ますと
隣りに寝ているおじいちゃんか
いはいかた。
あちて寝しに行く。
病院の廊下でうろろしていた。
「どこ行くの？」って私が聞くと
「うしに餌をやる時間だ」と言った。
「ここは病院でしょ」とって言うと
「あ、うんか」と言と病室に戻っていた。

写真表現に新しい一石を投じた作品が
初代写真「1\_WALL」グランプリを獲得!

GRAND PRIZE

仲山姉妹 Shimai Nakayama

JUDGES

- 菊地敦己 (アートディレクター)
鈴木理策 (写真家)
竹内万里子 (写真評論家)
野口里佳 (写真作家)
町口覚 (アートディレクター)
進行: 菅沼比呂志
<敬称略>



出品者のプレゼンテーションと質疑応答の概略

渡邊有紀 Yuki Watanabe
ずっと写真を撮る理由をさがしていた。4、5年前、たまたま旅先で撮ったのが
展示した木の写真だが、これを自分が撮れたことがうれしくて感動した。
<質疑応答>
●竹内:「CONTACT」というタイトルの意味と、3点の写真を展示した理由は?
●野口:自分でまだよく解っていないので、ちゃんと言葉にすることができない。

仲山姉妹 Shimai Nakayama
写真の人は私のおじいちゃん。この作品をつくるきっかけは、「余命少ないおじい
ちゃんを何も理解しないままに失うのか」と思ったこと。
<質疑応答>
●竹内:もしGPを獲得したとして、1年後の個展プランは?
●鈴木:ポートフォリオの中から展示作品としてこの2枚を選んだのはなぜ?

中山史崇 Fumitaka Nakayama
この作品は、空間の死と時間の死を同時に写し込んだ写真。ここに写る団地がで
きて50年が経過し、この街ほどの大きな空間が死んだ。
<質疑応答>
●鈴木:ライティングをせずに展示しているのはなぜ?
●野口:ほとんど黒い写真に、黒の台紙を使用しているのはなぜ?

矢島陽介 Yosuke Yajima
今という瞬間は過去と未来の線上にあるのではなく、前も後ろもない圧倒的な
「点」の上にあると思える。
<質疑応答>
●鈴木:ポートフォリオには風景や人物があるが、展示で人物だけに絞った理
由は?

佐藤航嗣 Koji Sato
人間をオスジェや化石のように感じる瞬間や、自然の中から生命や感情を感じる
瞬間に違和感を感じる。この感覚を写真で表現する時に、現実なのにあたかも
作られたような瞬間を狙って撮っている。
<質疑応答>
●菅沼:コメントにあった「オスジェ」や「化石」とは、どんなイメージなのか?

大丸剛史 Koji Omaru
自分が存在していなかった昔の生活に興味があり、貝殻を掘り始めて1年半にな
る。古代生活や遺跡への関心から転じて、我々の生活の痕跡であるゴミが打ち捨
てられた山林に目を向ける。
<質疑応答>
●鈴木:ポートフォリオの新作では、あまりゴミが見えない風景が増えているが?

審査委員の感想、そして審議

6人の出品者がプレゼンテーションを終え、進行役の菅沼さんが改めて「この場所では新しい写真表現を
発掘し、これから伸びていく才能を応援していきたい」と、リニューアルした写真「1\_WALL」の趣旨を説
明。続いて審査員一人ひとりにプレゼンテーションを聞いた感想を語ってもらった。



この後、出品者一人ひとりに対しての感想を語ってもらった。まずは、渡邊さんの作品について。菊地さん
が「写真がうまい。そして自分がやっていることを良く解っていると思う。しかし、もっと厳しさがほし
い」と注文を付けば、野口さんは「ポートフォリオ内も写真展示も、隙がないほどうまい。しかし、良い
作品はどこかに隙があるもの」と辛口のアドバイス。竹内さんも「うまい写真が撮れてしまう人。しかし、GP
を獲ったなら自分で作品を編集していく厳しさが必要。そのとき、成長する可能性がある」と同調しながら1年後の個展を楽しみにする。



中山さんの作品について。町口さんが「ポートフォリオも写真展示も思い込みが強く押しつけがましく思えた。見せ方と
しての工夫がほしい」と言えば、鈴木さんは「写真の黒をプリントで出すのは難しい技術。その点では評価したいが、展示に
もこだわってほしい。本人が一番大切にしたい部分が展示で感じられなかった」と、残念そう。「写真の黒をきちんと見せ
たいなら、黒いマットの台紙は必要なかった。思うようなライティングができなかったとのことだが、実際の現場では
100%の展示はあり得ないので、ピンチをチャンスに変える工夫があれば良かった」とは野口さん。

大丸さんの作品について。竹内さんが「この6人の中では唯一、対象を写すことから出発している人。ダイナミックでスパンの長い視野をもっているところが面白い」と言
えば、鈴木さんは「すごく好感がもてるが、プリントがあまり良くない。大きくプリントしたときの見え方も気を配るべき」とアウトプットに注文を出す。「1点1点の写真
は優しい写真。残るもの、残らないものなど連続したコンセプトを無理に作るのではなく、素直に写真を見れば良いと思う」と菊地さんがアドバイスをすれば、「写真1点1
点は良いが作品と呼べるものかどうか」とは野口さん。

投票、そしてGP決定

ここで各審査員にGP候補を2名ずつピックアップしてもらった。その結果は……

- 菊地/渡邊 仲山
鈴木/渡邊 仲山
野口/渡邊 仲山
町口/渡邊 仲山

これを集計すると、
渡邊5票/仲山4票/中山1票



「では、渡邊さんと仲山さんの2人に絞って審議してよろしいでしょうか」と菅沼さんが進行。各審査員に応援演説をして
もらった。野口さんが「私は写真にはいろんな役割があると思うので、形式に囚われずに決めたい」と仲山さんを推す。すると、
鈴木さんが「2名を選んだうちの順番はどうだろう」と言えば、菊地さんが「うーん、2人とも全く違う表現だけに順番をつけるの
は難しい」と悩み、町口さんが「新しい審査の場として写真とか、今までのようにこたごたに注文を付けるのか」と問題提起し、
竹内さんが「1\_WALLの写真部門の価値をどこに置くのかということでもあり、とあって写真へのこだわりを述べている。こ
こで進行の菅沼さんが「シンプルに、だれの個展が見たいかという観点で決めてもいいと思う」と述べるが、みんな絞り込めな
い。仲山さんに票を投じていない鈴木さんにその理由を聞くと「あえて個展の枠で語る人でもないと思う。一方、渡邊さんでは
ない。結果は、渡邊さん2票、仲山さん3票。この瞬間、GPは仲山さんに決まった。会場から自然と拍手が起り、すぐに割
れんばかりの拍手が会場を包んだ。審査員の鈴木さんから仲山さんへトフィーが贈られ、仲山さんが「がんばります。あり
がとうございまして。」とコメントし公開二次審査会は終了した。

審査会を終えて、出品者の声

- 渡邊有紀さん:
「とっても残念でした。でも、間近で審査を見ることができて良かったです。自分に対していろいろ言われたことは、すごく的確なことだと思えることばかりでした。」
中山史崇さん:
「展示できて幸せでした。ポートフォリオレビューは良いシステムだと思います。」
佐藤航嗣さん:
「審査は楽しかった。自分の写真について考える良い機会になりました。「1\_WALL」に出品して良かったです。写真を撮る人は一度は応募したほうがいいと思います。」
仲山姉妹さん:
「自分では誰にも負けない写真撮っているつもりですが、正直、写真をメインに作品づくりしているわけではないので、GPは獲れないと思っていました。でも、やはり写真
でしか表現できない内容もあるし、今回がそれでした。GPに選ばれて良かったです。1年後の個展の舞台は歯医者予定です。もちろん、「写真メインで行きます」と書いてお
いてください。」
矢島陽介さん:
「残念な結果だったけど、審査を間近に見てすごく良い経験になりました。自分の写真をどう伝えるか、人がどう感じるかを考える良い機会でした。これからも頑張りたいで
す。」
大丸剛史さん:
「今の自分に足りないものがたくさんあるんだと教えてもらいました。今回言われたことを自分なりに咀嚼して、今後も掘り続けていきたいです。写真が好きなので。」

<文中一部敬称略 取材・文/田尻英二>